



Level 10

2019年度
第**3**回



検定開始の合図があるまで問題を開いてはいけません。
まず、下記の注意をよく読んでください。

□ 検定上の注意 □

1. 検定時間は 90 分です。
2. 検定開始前に答案用紙に受検番号・氏名・生年月日を必ず記入してください。
3. 検定が始まって、印刷が見えにくかったり、ページがおかしかったりしたら、手をあげて監督者に知らせてください。
4. 問題のあいているところは自由に利用してください。
5. 問題は、答案用紙と一緒に回収します。

受検番号

氏名

《問題Ⅰ》 次の問いに答えなさい。

第一問 後の問題文には(1)～(4)のような論理的に誤った箇所があります。それぞれ(1)～(4)に該当する誤った箇所の行数

を答え、間違いを抜き出し、正しい形に直しなさい。

- (1) 指示語の使い方が間違っている。
- (2) 助詞・助動詞の使い方が間違っている。
- (3) 接続語が間違っている。
- (4) 読点の打ち方が間違っている。

第二問 問題文を四つの段落に分けて、第二、三、四段落の最初の七字（句読点・記号等を含む）を抜き出しなさい。

【問題文】

封建時代と近代とを区別する物差しの一つとして、近代的自我があります。自我とは簡単に言うと、自分という意識のこと……と言うと、「何だ、そんなもの、当たり前だ」と思われるかも知れません。実のところ、そう思うことができるのは、すでに近代的自我を獲得しているからなのです。江戸時代を想起してみてください。封建時代では、集団と個人との明確な区別がありません。その集団から個人を引きはがしたのが、近代的自我の確立なのです。集団とは「家」という価値規範のことです。江戸時代はまだ国家という概念が、希薄で武士階級の人間は、それぞれ家や藩とい

う集団に帰属していました。何のために生きるのかと問われれば、彼らは疑いもなく「忠」や「孝」という価値規範を挙げたことでしょう。たとえ主君が間違っていたとしても、どの主君に仕えるべきとするのが「忠」。この価値観に違和感を覚えるのであれば、それは私たちに自我があるからです。封建時代の人々にとっては、主君という個人と、藩という集団との区別がないのですから、主君に仕えることは自分が属する集団に仕えることが、それは疑う余地のないことだったのです。「お家一大事」「お家のために」といった言葉があることから、藩というのは大きな「家」に他なりません。主君は子どもの頃から「家」のためにはいつでも腹を切る覚悟を植え付けられます。個人よりも集団の方が優先させられるからです。「孝」という価値規範も、現代人が「親孝行」という言葉からイメージするような道徳観とは意味合いが異なります。「親」とは家長のことで、母親を含んだものではありません。家という集団と家長という個人とは分離できないものですから、家長に殉ずることはそのまま家という集団に尽くすことでした。明治になって西洋的な価値規範が日本に広がるにつれ、次第に集団から個人が分離し、近代的自我が人びとの間に芽生え始めました。このことは確かに人々を集団の束縛から解放し、自由をもたらしてくれました。だから、彼らは西洋におけるキリスト教のような共通の価値規範を持たないまま、「忠」や「孝」という価値規範を手放した結果、いかに生きるべきかが分からず途方にくれてしまったのです。集団に尽くす生き方を見失った彼らは、手っ取り早く、自分自身に尽くすことを始めました。その結果、彼らの自我は徐々にエゴイズムへとすり替わってしまったのです。近代がもたらしたもう一つの功罪は、彼らの中に今まで経験したことのない孤独を生じさせたことです。封建時代では、彼らは故郷（藩）や家という集団と一体化していたので、孤独を感じることは少なかったでしょう。しかし明治になって、故郷や家という集団から切り離されたことで、彼らは深い孤独を抱えることになりました。

《問題Ⅱ》 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある秋フランス仏蘭西から来た年若い洋琴家ピアニストがその国の伝統的な技巧で豊富な数の楽曲を冬にかけて演奏して行ったことがあった。そのなかには独逸ドイツの古典的な曲目もあったが、これまで噂ばかりで稀まれにしか聴けなかった多くの仏蘭西系統の作品がもたらされていた。私が聴いたのは何週間にもわたる六回の連続音楽会であったが、それはホテルのホールが会場だったので聴衆も少なく、そのため静かなこんもりした感じのなかで聴くことができた。回数を積むにつれて私は会場にも、周囲の聴衆の頭や横顔の恰好かっこうにも慣れて、教室へ出るような親しさを感じた。そしてそのような制度の音楽会を好ましく思った。

その終わりに近いある※アーベントのことだった。その日私はいつもにない落ちつきと頭の澄明を自覚しながら会場へはいった。そして第一部の長いソナタを一小節も聴き落すまいとしながら聴き続けていった。それが終わったとき、私は自分をそのソナタの全感情のなかに(1)させることができたことを感じた。私はその夜床へはいつてからの不眠や、不眠のなかで今の幸福に倍する苦痛をうけなければならぬことを予感したが、その時私の陥っていた深い感動にはそれは何の響きも与えなかった。

休憩の時間が来たとき私は離れた席にいる友達に目くばせをして人びとの肩の間を屋外に出た。その時間私とその友達とは音楽に何の批評をするでもなく黙り合って煙草を吸うのだったが、いつの間にか私達の間できまりになってしまった各々の(2)ということも、その晩そのときにとっては非常に似つかわしかった。そうして黙って気を鎮めていると私は自分を捕えている強い感動が一種無感動に似た気持を伴って来ていることを感じた。煙草を出す。口にくわ

える。そして静かにそれを吹かすのが、いかにも「何の変わったこともない」感じなのであった。——燈火を赤く反映している夜空も、そのなかにときどき写る青いスパークも。……しかしどこかからきこえて来た軽はずみな口笛がいまの※ソナタに何回も繰り返されるモティーフを吹いているのをきいたとき、私の心が鋭い（3）にかわるのを、私は見た。

休憩の時間を残しながら席に帰った私は、すいた会場のなかに残っている女の人の顔などをぼんやり見たりしながら、心がやっと少しずつ寛解して来たのを覚えていた。しかしやがてベルが鳴り、人びとが席に帰って、元のところへもとの頭が並んでしまうと、それも私にはわからなくなってしまふのだった。私の頭はなにか凍ったようで、はじまろうとしている次の曲目をへんに重苦しく感じていた。こんどは主に近代や現代の短い仏蘭西の作品が次つぎに弾かれていった。

演奏者の白い十本の指があるときは泡を嚙^かんで進んでゆく波頭のように、あるときは戯れ合っている家畜のように鍵盤に挑みかかっていた。それがときどき演奏者の意志からも鳴り響いている音楽からも遊離して動いているように感じられた。さて突然何を思ったのだろうか。そうかと思うと私の耳は不意に音楽を離れて、息を凝らして聴き入っている会場の空気に触れたりした。よくあることではじめは気にならなかったが、プログラムが終わりに近づいてゆくにつれてそれはだんだん顕著になって来た。明らかに今夜は変だと私は思った。私は疲れていたのだろうか？ そうではなかった。心は緊張し過ぎるほど緊張していた。一つの曲目が終わって皆が拍手をするとき私は癖で大抵の場合じっとしているのだが、この夜はことに強いられたように凝然としていた。するとどよめきに沸き返りまたすーっと収まってゆく場内の推移が、なにか一つの長い音楽のなかで起ることのように私の心に写りはじめた。

それは人びとの喧噪けんざうのなかに囲かこまれているとき、両方の耳に指で栓せんをしてそれを開けたり閉じたりするのである。するとグワウツ——グワウツ——という喧噪の断続とともに人びとの顔がみな無意味に見えてゆく。人びとは誰もそんなことを知らず、またそんななかに陥おとっている自分に気がつかない。——(A)それは演奏者の右手が高いピッチの※ピアノニツシモに細かく触れているときだった。人びとは一斉に息を殺してその微妙な音に絶え入っていた。ふとその完全な窒息に眼覚めたとき、愕然がくぜんと私はしたのだ。

「なんとこの不思議だろうこの石化は？ 今なら、あの白い手がたとえあの上で殺人を演じてても、誰一人叫び出そうとはしないだろう」

私は寸時まえの拍手とざわめきをあたかも夢のように思い浮かべた。(B)あんなにざわめいていた人びとが今のこの静けさ——私にはそれが不思議な不思議なことに思えた。そして人びとは誰一人それを疑おうともせずひたむきに音楽を追っている。言いようもないはかなさが私の胸に沁しみみて来た。私は涯はてもない孤独を思い浮かべていた。音楽会——音楽会を包んでいる大きな都会——世界。……小曲は終わった。木枯のような音が一しきり過ぎていった。そのあとにはまたもとの静けさのなかで音楽が鳴り響いていった。(C)幾たびとなく人びとがわわわっとなつてはまたすーっとなつていったことが何を意味していたのか夢のようだった。

最後の拍手とともに人びとが外套がいとうと帽子を持って席を立ちはじめると、私は病気のような(4)感で人びとの肩に伍ごして出口の方へ動いて行った。出口の近くで太い首を持った背広服の肩が私の前へ立った。

(D)そしてその服地の匂いが私の寂寥せきりょうを打ったとき、何事だろう、その威厳に充ちた姿はたちまち(5)してあえなくその場に仆たおれてしまった。私は私の意志からでない同様の犯行を何人もの心に加えることに言

いようもない憂鬱を感じながら、玄関に私を待っていた友達と一緒にいるために急いだ。その夜私は私達がそれからい
つも歩いて出ることになっていた銀座へは行かないで一人家へ歩いて帰った。(E)

梶井基次郎「器乐的幻覚」

※アーベント…夕方から始まる音楽会・演奏会などの催し物。

※ソナタ…器楽曲の一形式。

※ピアノニッシモ…音楽用語で、「非常に弱く」の意味。

第一問 次の文章を元の場所に戻して、その直後の五字を抜き出しなさい。

読者は幼時こんな悪戯をしたことはないか。

第二問 (1) ～ (5) に入る言葉を、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 嫌悪 イ 没入 ウ 萎縮 エ 寂寥^{せきりょう} オ 孤独

第三問 (A) (E) に入る文を、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア もはやすべてが私には無意味だった。

イ ちょうどそれに似た孤独感が遂に突然の烈しさで私を捕えた。

ウ 私の予感していた不眠症が幾晩も私を苦しめたことは言うまでもない。

エ それは私の耳にも目にもまだはつきり残っていた。

オ 私はそれが音楽好きで名高い侯爵だということを知った。

第四問 問題文中に余分な一文が一箇所あります。その一文の初めの五字(句読点を含む)を抜き出ささい。

第五問 — 線部「なんという不思議だろうこの石化は」とありますが、「石化」とは、具体的に何がどうなったこと

か、三十字以内(句読点を含む)で答えなさい。

《問題Ⅲ》 次の問いに答えなさい。

第一問 次の言葉を並べかえて、一文を作りなさい。

- (1) えびの 姉には ある かにと 私の アレルギーが 。
- (2) させる 幼児に のは 漢字の 効果的だ 覚え 読みを 。

第二問 次の言葉を並べかえて、一文を作りなさい。ただし、それぞれの文には、不要な言葉が二つずつあります。

- (1) 権利が 機関から 与える 得る 公的な 政治を 情報を 国民には ある 。
- (2) 国政の マスコミから 勢力を ある 報道する 動向を 役割が マスコミには 。

第三問 次の言葉を並べかえて、一文を作りなさい。

- (1) 蓮 だと 僕 生 は 君 托 と 一 。
- (2) い の 言 語 言 は 君 壮 発 も 大 だ っ 。

第四問 次の文章を読んで、() に当てはまる二字の漢字を答えなさい。

部下が無能であることをことさら他に示して、対照的に自分の価値を誇示しようとするものがある。それは見当違いである。

成功したい者は、() な部下こそ持たなければならない。

部下に任せられることが多ければ、自分の仕事に専念できるからだ。

第五問 次の文章を読んで、() に当てはまる二字の言葉を、後の漢字を組み合わせて答えなさい。

時流に抗して、その姿勢を貫き通すのは難しい。

世の大勢に支持されていることが必ずしも正しいとは限らない。ときにはその間違いに気づいてしまうこともある。しかし、そのことは志を同じくする親友でない限り、口に出して言わない方が身のためである。それを公言すれば、即ち、() に異を唱えたことになるからだ。世の中には意見を否定されただけで気を悪くする人たちがいるもので、これでは世間全体に敵を増やすことになってしまう。

世 者 衆 個 名 民 賢 新

《問題Ⅳ》 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

独立の氣力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐るる者は必ず人に諛うものなり。常に人を恐れ人に諛う者は（1）これに慣れ、その面の皮、（a）のごとくなりて、恥ずべきを恥じず、論ずべきを論ぜず、人をさえ見ればただ腰を屈するのみ。慣れたることは容易に改め難きものなり。（2）今、日本にて平民に苗字・乗馬を許し、裁判所の風も改まりて、表向きはまず士族と同等のようなれども、その習慣にわかに変ぜず、平民の根性は旧の平民に異ならず、言語も賤しく応接も賤しく、目上の人に逢えば一言半句の理屈を述ぶること能わず、立てと言えば立ち、舞えと言えば舞い、その柔順なること家に飼いたる瘦せ（b）のごとし。実に無氣無力の鉄面皮と言うべし。

昔鎖国の世に旧幕府のごとき窮屈なる政を行なう時代なれば、人民に氣力なきもその政事に差つかえざるのみならず（3）便利なるゆえ、ことさらにこれを（c）に陥れ、無理に柔順ならしむるをもって役人の得意となせしことなれども、今、外国と交わるの日に至りてはこれがため大なる弊害あり。たとえば田舎の商人ら、恐れながら外国の交易に志して横浜などへ来る者あれば、まず外国人の骨格たくましきを見てこれに驚き、金の多きを見てこれに驚き、商館の洪大なるに驚き、蒸気船の速きに驚き、すでにすでに（d）を落として、追いつきこの外国人に近づき取引きするに及んでは、その駆引きのするどきに驚き、あるいは無理なる理屈を言いかげらるることあればただに驚くのみならず、その威力に震い懼れて、無理と知りながら大なる損亡を受け大なる恥辱を蒙ることあり。こは一人の損亡にあらず、一国の損亡なり。一人の恥辱にあらず、一国の恥辱なり。（4）馬鹿らしきようなれども、先祖代々独

立の気を吸わざる町人根性、武士には窘くろしめられ、裁判所には叱なぐられ、一人扶持取る足輕に逢いてもお旦那さまと崇めし魂は腹の底まで腐れつき、一朝一夕に洗うべからず、かかる臆病神の手下どもが、かの大胆不敵なる外国人に逢いて、胆をぬかるるは無理ならぬことなり。これ（5）内に居て独立を得ざる者は外にありても（e）すること能わざるの証拠なり。

福沢諭吉「学問のすゝめ」

第一問 次の言葉を元の場所に戻して、その直後の五字（句読点・記号等を含む）を抜き出なさい。

いわゆる「習い、性となる」とはこのことにて、

第二問 — 線部「その習慣にわかに変ぜず」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「その習慣」とはどんな習慣か、自分の言葉で二十五字以内（句読点を含む）で答えなさい。
- (2) — 線部の理由を十字前後で答えなさい。

第三問 日本が外国と対等に渡り合えないのは、幕府がどのような政策をとったからか、自分の言葉で四十字以内(句

読点を含む)で答えなさい。

第四問 (1) (5) に入る言葉を、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

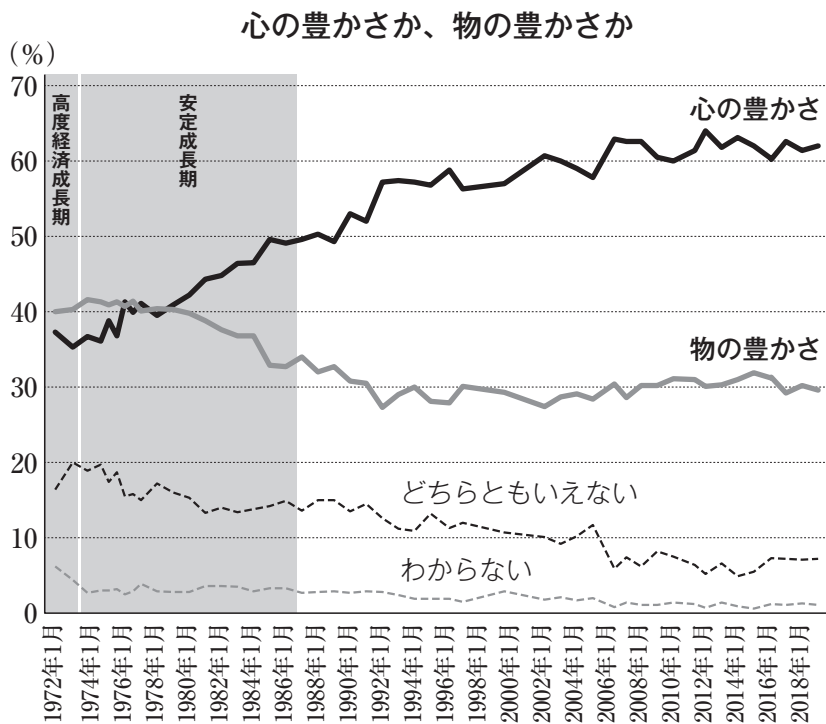
ア かえって イ 実に ウ しだいに エ すなわち オ たとえば

第五問 (a) (e) に入る言葉を、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 肝 イ 犬 ウ 独立 エ 無知 オ 鉄

《問題V》 次の問いに答えなさい。

内閣府の世論調査によると、「豊かさ」に対する国民の意識はこの数十年間で大きく変化しています。かつては「心の豊かさ」より「物の豊かさ」を重視する人が多かったのが、1979年を境に「心の豊かさ」を重視する人の方が多くなり、近年では、「心の豊かさ」を重視する人の割合が「物の豊かさ」を重視する人の約2倍になっています。



内閣府「令和元年度 国民生活に関する世論調査」より作成

第一問 高度経済成長期から安定成長期にかけて、「物の豊かさ」を重視する人が減り、「心の豊かさ」を重視する人が

増えてきた理由を考察し、次の言葉を使って百五十字以内（句読点等を含む）で答えなさい。

【使用する言葉】

- ① 3C ② 便利 ③ 普及

※3C：1960年代半ばのいざなぎ景気時代に普及し始めた3種類の耐久消費財（カラーテレビ、クーラー、自動車）を指す。

1950年代後半から「三種の神器」として普及した白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫の家電3品目と比較して、「新・三種の神器」とも言われる。

第二問 二十年以上前から現在まで、「心の豊かさ」を重視する人の割合が「物の豊かさ」を重視する人の約2倍のま

ま横ばいで推移しています。このように「物の豊かさ」より「心の豊かさ」を重視することは、現代のどのような面に現れていると思いますか。次の言葉を使って百五十字以内（句読点等を含む）で答えなさい。

【使用する言葉】

- ① インターネット ② 断捨離 ③ モノ消費 ④ コト消費

